



障がい者そして女性は…

家族の支えをはじめ福祉サービスを受けていた障がい者にとって、環境が変わった避難生活は非常に大変な状況でした。他の人に迷惑をかけるはいけないと部屋に閉じこもり状態の方、普段と違う事態に戸惑い、布団の中で動けない方など様々でした。高齢者と同じように障がいのある方は、町の中心から少し離れた場所での避難生活で、巡回バスはあるものの交通の便が悪く思うように外出できないなど苦労されています。

夫や息子が原発関連施設に勤務されている女性は、「休暇で避難所に帰ってきてどんな仕事なのか話さないので、夫や息子の身体が心配だが自分の気持ちを口に出すこともできない」と妻として母として何もできない自分の状態を話していました。別の女性は「ふと夫の顔を見たら、私の夫はこんな歳だっけ?」と思っただけです。身体が資本…このままでは夫も自分もダメになると思ひ、避難所の玄関先で嫌がる夫と朝のラジオ体操を始めたところ日に日に参加者が増え、今では交流の場として活用されている様子でした。健康を気遣いながら、人の繋がりを築く女性にたくましさを感じました。(高橋 万紀子)



特集

3.11 東日本大震災

相互の助け合い・共に生きること…
今私達に出来ることは?

被災地支援に行かれた町職員(保健師)に伺いました。

☆被災地派遣職員☆

福祉課・精神障害者小規模地域生活支援センター

保健師 高橋万紀子さん

健康増進課・保健センター

保健師 仲野真由美さん

健康増進課・介護保険係

保健師 中齋つかささん



子どもの心に残ることは…

避難所を回り住民の健康相談と、県外に避難している方へ子どもの予防接種のお知らせを作成するといった支援を行ってきました。元々人の繋がりが強い町のように、健康相談で各家を回っている時も「あそここの部屋にも声かけていって。最近部屋から出てないから…」と、私たちに伝えるに来てくれたり、避難所内にいる子どもに声をかけたり、町の人同士、お互いを気遣っている様子がとても伝わりました。今までの生活が一変し、その上先の見通しも分からず、不慣れた環境での子育て、通学、仕事など多くの不安を抱えながら生活する辛さは想像できるものではないと感じました。毎朝小学校へ通学するバスを待つ子ども達が見ている様子や、大型バスを二〜三台連ねて通学して行く子どもたちを見ると「震災がなければ、こんなことにならなかつたのに…」「大震災や今の生活経験が、子どもの心や記憶にどう残るのだろうか」という想いがしました。

大熊町の保健師が「私達の町は暖かく・住みやすく・何より人がいい」と自慢していたのが印象的でした。(仲野 真由美)



高齢者は…

多くの高齢者の方は、生まれてからずっと大熊町で生活をしてきた為、若い方と比べ環境適応に時間がかかり、町がどんな状況であれ生まれ育った家に早く帰りたい気持ちが強くなりました。殆どの方が持病を抱え、継続して服薬が必要な状況でしたが、いつものお医者さんの薬でないと飲めないなど、慣れない生活の中で体調を崩し病院に搬送された方もいます。これまで家事や農作業など忙しくしていた方々、特に女性は食事もお風呂も用意される生活は手持ち無沙汰となり、部屋に閉じこもり鬱状態になる方もいました。

家族を亡くされた方は「みんなもつらい思いをしているのだから」と悲しみを表すこともできず、震災のショックと共に心にしまい込んでいました。被災者同士では互いに気を遣い話せないことも、外部から来た第三者には辛い気持ちを吐き出すことができるのです。慣れ親しんだ人が近くにいることは大切ですが、それ以外にも本音を話せる人の存在が必要だと感じました。(中齋 つかさ)

東日本大震災により亡くなられた方々とそのご遺族に対し、深く追悼の意を表しますとともに被害に遭われた方々や避難生活を続けておられる方々に心からお見舞い申し上げます。

平時にできないことは
有事にもできない

高齢者は慣れ親しんだ土地を離れての生活の辛さ、地域の方がどこにいるか分からない不安、障がい者は今まで信じてきた主治医との別れ、環境の変化に対応できない身体、子どもをもつ親は成長していく子どもの気持ち、知らない学校での生活など数えきれない程の現実を受け止めているようです。

被災地を目の当たりにした三人の保健師は、「個々を繋ぎ地域を作る、日常の見回り、平時にできないことは有事にもできないので日頃からできるように心がけ保健師として皆さんに安心感を与え、誇りを持てる存在でありたい」と、今回の支援を通して被災地の方たちから学んだと話されていました。

震災が起きた直後・一か月後・二か月後…そして一年が過ぎた今では当然異なるニーズがあるのでしようがマスクを通して知る状況と実際に現地に行き、目にした現状の話は想像を遙かに超えていました。

顔見知りの方が近くにいるという安心感、話を聞いてくれる人がいるだけでも良い。普段からそうありたい。

絆



被災地支援 福島県大熊町へ…

先の大震災により、原発事故の影響で住民及び町役場機能も会津若松市に移転を余儀なくされた大熊町に、三芳町より3名の保健師が交代で昨年5月から6週間の支援に行きました。大熊町への職員派遣は、全国町村会より埼玉県へ派遣要請があり三芳町と大熊町双方の支援条件などが合い実施されました。

福島県は、大熊町のある浜通り・中通り・会津地方の3つの地域からなり、気温の差、食べ物の違い等同じ県でも生活形態が異なります。大熊町は温暖な地域、会津若松市は雪の降る寒い地域、不便な生活の中でも前向きに逞しく生きる…“東北魂”を応援したい。

